

新年明けましておめでとうございます

年頭所感

《一般社団法人日本 RPF 工業会会長 三輪 陽通》

明けましておめでとうございます。

皆様におかれましては期待や希望に満ちた新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年 12 月に開催された COP28 において「化石燃料からの脱却」などを進めるとした成果文書が採択され、石炭火力発電の段階的削減だけでなく、石油や天然ガスを含む化石燃料全体に削減対象が広がりました。エネルギーの 8 割を化石燃料が占める我が国は、エネルギーシステムの「脱炭素化」は急務です。また廃プラスチックの焼却処理による CO2 排出量は製造業全体の排出量の 6% もの規模があり、脱炭素化に向けた「廃プラスチックのケミカルリサイクル、マテリアルリサイクルへの機運」はより加速していくと予想されます。

しかし一方で、いわゆる「プラスチック新法」が昨年施行されて以降、自治体はケミカル・マテリアルへのシフトを模索しておりますが、決め手を欠き、踏み出せていないのが実情です。現状においては実装経験があり、長期間の納入実績を積んできた RPF に一日の長があると感じております。先駆者である RPF は、その転換へのソフトランディングにどう対策を打てるかが、今後の大きな課題と言えます。

工業会としましては RPF の経済優位性、サーマルリカバリーとしての性能、マテリアル原料としての多様性など、RPF の特性を更にアピールしながら、よりメジャーな製品（原料）になるよう社会の要求に沿いながら尽力して参ります。

また、海外展開では、昨年 11 月に工業会で台湾を訪問し、台湾バイオマス協会と RPF のセッションを開催しました。国際市場で RPF を日本独自の技術とみなされてはメジャーな燃料になれません。東南アジア諸国への幅広い対応と同時に、台湾、韓国などのアジア先進地域との環境分野、廃棄物燃料の分野での交流、連携をはかり、国際的な RPF の輪を海外へと広げていくことにも力を注いで参ります。

おかげさまで、RPF 製造にかかわる我々の業界も、社会的な注目度が高くなり、様々な方面からの協力要請や情報共有が求められる立場になりました。そのことは、我々自身が今まで以上に、信頼に値する企業価値の制度向上や安全衛生対策、人材育成などの所謂ガバナンスを高めていく必要があることを示唆しています。また、国際的な労働人材市場での競争に勝てる新しい「外国人雇用の変革」にも、タイムリーに、かつ的確に対応していくことが求められています我々の工業会の根幹である各委員会活動は、その責任においてこれらの分野の知見向上に期待と同時に一層の研鑽が求められると思います。

結びに、皆様にとりまして幸多き年になりますことご祈念申し上げ、挨拶と致します。



《技術品質委員長 見澤 直人》

新年明けましておめでとうございます。本年もよろしくお祈り申し上げます。
昨年3月に開催いたしましたweb工場見学会、12月に用途開発委員会と合同で開催いたしました第11回技術品質委員会勉強会に多くの方々にご参加いただきまして厚く御礼申し上げます。

昨年は新型コロナウイルス感染症が5類へと引き下げられたことにより、最近では地方においても人の流れが活発化しており、社会がアフターコロナ生活へと変遷しているのを実感いたします。また、多くの地域で電気代が値上がりし、日本のエネルギーの重要性がより顕著となった1年ではないでしょうか。

世界的な脱炭素の流れを受けてRPFへの期待度は日に日に高まっております。他方、プラスチック循環促進法施行等により外部環境は大きく変化しています。現在、私共の業界には追い風も逆風も同時に吹いている状況であり、風任せではどこに流されるか分かりません。技術品質委員会は皆様に有益な情報を発信し、羅針盤のような存在として皆様のお役に立てるよう努力してまいります。

会員企業の皆様にとって新しい年が幸多きものになりますことをお祈り申し上げます。
本年もどうぞよろしくお祈り申し上げます。



《安全衛生委員長 綾仁 裕》

新年明けましておめでとうございます。本年も宜しくお祈り申し上げます。
日頃より当工業会の活動・運営において、特段のご配慮とご協力を賜り心より感謝申し上げます。

昨年を振り返ると、世界的なインフレと円安など、先行きの不透明感がより一層強まった一年でした。

2024年の情勢についても、引き続き先行きが不透明であり、我々の事業環境も目まぐるしく変化する状況が続くと予想されます。また、世界レベルの脱炭素や循環経済が加速し、我々業界の取り組みもより一層必要性が高まります。新たなビジネスモデルや技術の導入が求められ、過去の慣習に頼らない手法の採用が必要となります。

一方で、昨年11月にドバイで開催された『COP28』では、各国の意見の隔たりにより、温室効果ガスの排出削減や、化石燃料の段階的削減に向けた議論が難航し、日本の化石燃料脱却も待ったなしの状況です。

このような先行きを見据える中、足元が好調であることは喜ばしいものですが、近年、廃棄物リサイクル業界では、大型機械によるはさまれ、巻き込まれたといった事故が多発しております。引き続き、業界として様々な対策を講じていかなければならないと考えております。

安心・安全な職場を築くためには皆さん一人一人の絶え間ない努力の積み重ねが重要です。多くの事故発生という辛い経験を通じて、安全管理のさらなる徹底を図り、今年も無事故、無災害で過ごしていきたいと決意を新たにしております。

引き続き、会員の皆様からご支援賜り当会の発展に繋がるよう邁進致します。会員企業の皆様にとって、新年が素晴らしい一年となるよう心よりお祈り申し上げます。



《用途開発委員長 田墨 啓治》

新年あけましておめでとうございます。

昨年の用途開発委員会は、新体制下では2年目となり、新たなメンバーも加わり活動を実施して参りました。GHG 排出係数見直し分科会の活動では、国立環境研究所の河井先生のサポートを頂き、国家インベントリー作成を行っている組織と有意義な情報交換が得られました。GX サプライチェーンでの協議を進めて参ります。

9月には高度選別施設を有する正会員の富山環境整備株式会社様のご協力を頂き、施設見学会を開催することが出来ました。少人数で大量な選別処理が可能な施設でした。混合プラスチックが新たな資源に活用できる先進的な取り組みに驚きました。

12月には、技術品質委員会との合同勉強会が行われ、グローバルな視点と国内需要家の取り組み効果や将来に向けた利用用途についての勉強会が行われました。

脱炭素化ビジネスとしてRPF業界には多くの期待が寄せられる一方で、高齢化、人口減少に伴う社会的課題にも取り組んで行かなければならない時期と認識します。

会員企業が知恵を出合い、協力しあいながら業界振興に繋げる一年にして参りましょう。

会員企業様にとって、素晴らしい年になりますことをお祈り申し上げます。



《総務広報委員長 加山 順一郎》

新年明けましておめでとうございます。本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

総務広報委員会では昨年コベルコ建機様のご協力の元、働き方改革、DXを活用した新たな展開として重機の遠隔操作体験の勉強会を実施させていただきました。労働人口が益々減少する中、また熟練者に依存した判断や作業の多い業界としての社会課題の解決方法の一つとして開発されました。本年も総務広報委員会としては、積極的に行政、メディアへの情報発信から、各委員会、事務局はもとより、様々な業界団体とも密接に連携しRPFの有用性、必要性をアピールして参ります。また国内だけでなく、海外の動向や国際的なエネルギー問題、SDGs 関連等、会員の皆様のお役に立てる情報をいち早くお届けさせていただきます。

会員企業の皆様の事業発展の一助に繋げていけるよう一生懸命取り組んで参ります。

本年が皆様にとって素晴らしい年になることを心より祈念いたします。

本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。



《海外事業支援ワーキンググループ長 片境 邦喜》

新年明けましておめでとうございます。本年も宜しくお願い致します。

昨年11月には台湾にて5年振りとなる海外視察を総勢30名で実施しました。台湾のバイオマス協会を窓口台湾工業局・台湾大学・台湾主要メーカー各社の産学官代表者との意見交換やRPF生産企業及びRPF需要家の見学が出来、有意義な活動となり今後も連携が図れることとなりました。

今年も台湾以外のエリアとも連携を図るべく、各方面と情報交換を行い正会員・賛助会員の皆様へ情報を発信させて頂きたいと思っております。



日本はもとより全世界的に脱炭素の動きが加速し、バイオマス燃料の需要は更に高まり、特にアジア地域ではRPFの価値も高まると思われま

す。外国人技能実習生の帰国後の活躍の場につきましても、当工業会が一助となれるよう活動を行ってゆきたいと考えております。

今年も皆様にとりまして幸多き年となります様、祈念致します。

《青年部会長 小川 貴広》

2024年の新春を迎えるにあたり、謹んでご挨拶を申し上げます。

昨年は、青年部として多くの事業を開催させていただきました。新年賀詞交換会から始まり、第2回勉強会、第1回視察研修会と目まぐるしく事業を行いました。参加していただきました方々、また青年部会にご協力いただいています多くの企業の皆様に感謝申し上げます。本年度は会員数も50名に近づき、益々活気だっている青年部ですが、会員の皆様からアイデアや横のつながりが創出されてきています。今後社会で実装していくためにも、正会員、賛助会員隔たりなく、また多くの関係団体と連携をとりながら、直近の課題解決、そして将来の姿を描きながら、引き続き活動をして参る所存です。会員の皆様には、益々のご協力を賜りますようお願いし、新年のご挨拶といたします。



《技術品質委員会・用途開発委員会 合同勉強会》

2023年12月08日 エッサム神田2号にて第11回技術品質委員会、第4回用途開発委員会による合同の勉強会が開催されました。

三輪会長より開会に際してご挨拶が有り、続いて技術品質委員会の三澤委員長よりご挨拶が有りました。

第一部

経済産業省 製造産業局 素材産業課 課長補佐 岸田学 氏

プラスチック汚染に関する法的拘束力のある国際文書の策定に向けた政府間交渉委員会 (INC) について

INC 発足は2019年6月G20大阪サミットで大阪ブルー・オーシャン・ビジョンの全世界での実現に向けて広くビジョンを共有し、それを皮切りにプラスチック汚染に対し世界的な取り組みの機運が高まり、2022年2月にUNEA (国連環境総会) にてINCの設置が行われました。2024年末までに条約作りの作業完了を目指しているとの事です。これらにより製品設計や流通、販売、消費段階、廃棄物適正管理を含む持続可能な生産と消費に向けて法的拘束力がある条例が発効される可能性が有ります。既にゼロドラフトが公開されており、一次プラスチックポリマーの製造量の削減目標や管理体制に関して言及されています。

その他にもプラスチック製品や廃棄物管理についても具体的な指標を掲げ、それらに各国が準拠していく流れになっています。

日本はプラスチックの回収率は9割以上と世界的にも高い水準ですが、一方で回収率に対するサーマルリサイクルを除くリサイクル率は2割強程度と他国との差がそこまで出なくなっている。日本は回収は出来ている一方でリサイクルが推進していかないといけない課題があるとお話頂きました。



第二部

製紙産業の今後の取り組みと展望について

日本製紙連合 常務理事 河崎雅行 氏

紙の需要が下がっている状況下で、今後産業としての取り組みについて講演頂きました。

渋沢栄一氏設立した会社が日本の製紙産業の原点になっています。日本製紙連合様は昨年設立から 50 年を迎え、様々な部会が形成され活動されています。

取り巻く環境として、原料チップの高騰が続いています。7 割近くが輸入に頼っており、価格の高騰に加えて円安の影響も受け業界全体の利益を圧迫している状態です。

製紙業界といっても CO2 削減を目標を掲げ、省エネ機器の導入や植林や新素材開発などに取り組まれています。製紙用パルプを活かして新たな用途展開としてストローやカップ等を開発。プラスチックと比べ、海水内でも生分解が進む事が確認されたようです。リサイクルを前提とした製品設計が今後求められるとお話が有りました。



第三部

SRF から SRM へ 欧州の潮流を踏まえて

国立環境研究所 資源循環領域 河井 紘輔 氏

日本は SRF (Solid Recovered Fuel) に関する国際規格を開発する技術委員会 TC300 に対して投票権を持つ P メンバーとして参画をしています。

TC300 では様々な廃棄物に関する規格が開発されていますが、現在かさ密度やその他の項目でも継続して発行を目指しています。

その他、欧州のごみ処理状況について解説を頂きました。EU 加盟国は 2035 年までに埋め立て処分量を一般廃棄物全体発生量の 10% 以内に抑える事、廃棄物枠組み指令で分別回収やリサイクルの指令がだされています。またリサイクル促進や温室効果ガス排出削減を目的に焼却税が導入され始めているとの事でした。

ミラノ近郊では堆肥化も可能なプラスチックも普及しはじめており、生ごみのメタン発酵と堆肥化が進められています。国外紛争の影響も有り、エネルギー回収を国策として進めている傾向が強いとの事でした。

日本国内の人口偏移について、少子高齢化が進み、使用済み紙おむつが将来焼却ごみに占める割合が 10% を超えると推測されています。紙おむつリサイクルも国内で技術と設備の実績も増えてきており、今後注目すべき分野であるとお話が有りました。

世界的な潮流からも廃棄物から素材へと考え方・認識を変えていく必要があるとお言葉が有りました。



第4部

マテリアルリサイクル+ケミカルリサイクルでリサイクル残渣も有効利用
株式会社大瀧商店 代表取締役 大瀧吉宏 氏

大瀧商店様はマテリアルリサイクルと一般廃棄物の収集運搬から始まり、現在は製鉄業向けホーミング材や加炭材の製造開発を行われています。ガラス繊維や太陽光パネル、粉末塗料など製鉄所の要望にマッチした品質の製鋼副資材を開発しています。

鉛や銅、硫黄など成分基準はあるようですが、塩素濃度は定めがないようです。RPFより製造コストが倍以上かかり、需要量は半分以下であるのが課題であるとお話頂きました。

ホーミング抑制剤は高炉メーカー様にて利用されており、加炭材は電気炉メーカー様で利用されています。年間では加炭材は35万1,000t、ホーミング材では12万8,400tが見込まれています。

今後も可能な限りマテリアルリサイクルに取り組み。難しい材料はケミカルリサイクルで提案していきますとお話が有りました。



《新入会員紹介》

- 11月1日入会 有限会社安原商店 (正会員)
- 11月1日入会 株式会社ヤクシ (賛助会員)
- 11月1日入会 株式会社クリーンライフ (正会員)
- 12月1日入会 株式会社イーシーセンター (正会員)
- 1月1日入会 株式会社PFU (賛助会員)

《今後の活動》

1. 安全衛生委員会主催 危険体験・体感教育研修会
 - 2/7 コベルコビジネスパートナーズ株式会社 加古川技術研修センター
 - 2/21 コベルコビジネスパートナーズ株式会社 加古川技術研修センター
2. R5年度 第3回理事会
 - 2/16 15:00～ エッサム神田ホール1号館
3. 第13回定時社員総会
 - 6/13 明治記念館

【編集後記】

2024年は辰年です。辰年のキーワードである「変革（転機）」や「激動」が示すように、時代が動く年となるかもしれません。大きな出来事が起こると予想され、これまでの努力が実って夢が叶いやすい年と言え換えられます。なかには努力が成果につながらないこともあるかもしれません。しかし、くさらずに努力を続ければ水面下で着実に育ち、次につながる年になると言えるでしょう。また7月には20年ぶりとなる新デザインの紙幣が発行されます。

会員の皆様におかれましても大きく飛躍できる一年であることを心よりお祈り申し上げます。

本年も会員の皆様にお役にたてる情報をいち早く提供できるよう、引き続き宜しくお願ひ申し上げます。

(文責；総務広報委員長 加山順一郎)

編集制作：総務広報委員会発行：一般社団法人日本RPF工業会

令和6年1月吉日

〒101-0044 東京都千代田区鍛冶町1-9-2 高梨ビル5階

TEL:03-6206-8000

FAX:03-5296-0303

<http://www.irpf.gr.jp>